

U 高専 1 年男子の飲酒に関する実態調査

石尾 潤*, 藤岩 秀樹**, 伊藤 耕作*, 幸田 三広***, 中村 貢治*

Factual investigation regarding alcohol drinking of male first-year students at U technical college

Jun ISHIO*, Hideki FUJIIWA**, Kosaku ITO*, Mitsuhiro KOTA***, Koji NAKAMURA*

Abstract: The purpose of the present investigation was to clarify the actual status of alcohol drinking of male first-year students at U technical college. Subjects were a total of 434 male first-year students at U technical college. The investigation covered a six year period, from 2004 to 2009, with questionnaire-based written surveys undertaken during health and physical education classes. The results were that approximately 80 percent of surveyed subjects were persons with past experience of alcohol drinking. It was learned that a majority of persons with alcohol-drinking experience were persons who drank small amounts of alcohol several times a year, and that there were few regular alcohol drinkers. Also, over the six year period, there were 23 cases of persons who had experienced “chugging down alcoholic drinks (*ikki-nomi*),” said to be a risk factor for acute alcohol poisoning. From the results of the present investigation, it is thought that the following are necessary: from an early stage, not to enable alcohol-drinking experiences with peers who will cause an increase in annual alcohol-drinking frequency, and to foster a deep-rooted awareness of the dangers of “rapidly chugging down alcoholic drinks (*ikki-nomi*).”

Key words: technical college students, factual investigation, alcohol drinking

1. はじめに

本調査ではU高専1年男子の飲酒実態を明らかにする。具体的には2004年から2009年までの6年間に実施した飲酒に関する質問紙調査を整理し、まずは過去の飲酒経験や最近1年間の飲酒頻度を、続いて、イッキ飲み経験の有無を明らかにする。先行研究としては、中高生の飲酒実態を追跡した1995年以降の全国調査¹⁻⁹⁾を比較対象とする。これらの報告によると、全国の中高生の飲酒経験や飲酒状況は近年減少傾向にあるとされているが、地域によっては未成年者の飲酒状況は年々深刻化を増している⁹⁾との報告もなされており、その実態はいまだ一致した見解が得られていない。未成年者の飲酒問題に適切に対処するためには、対象者の実態を正確に把握することである。本調査ではこれまでに報告されてきた先行研究との比較から問題点や未解決な部分を洗い出し、現状に即した飲酒防止教育を展開するための基礎資料を得ることを目的とする。

(2012年12月21日受理)

*宇部工業高等専門学校一般科「責任著者」

**尾道市立大学経済情報学部

***大島商船高等専門学校一般科目

2. 方法

対象はU高専1年生男子述べ434名であった。調査は2004年から2009年までの6年間、毎年10月に行われる保健体育の飲酒防止教育の際に、飲酒経験と飲酒行動に関する質問紙調査を行った。質問紙調査のおもな内容は、1)過去の飲酒経験、2)最近1年間の飲酒頻度、3)飲酒の状況、4)イッキ飲み経験の有無、5)お酒の強さに対する自己評価であった。

3. 結果

3.1. 過去の飲酒経験と最近1年間の飲酒頻度

対象者434名のうち、過去に一回でも飲酒の経験が「ある」と回答したものは345名(79.5%)、「ない」と答えたものは89名(20.5%)であった。最近1年間の飲酒頻度は、「1年間で数回(年間5回以内)」飲酒していると回答したものが247名(56.9%)で最も多く、以下「2か月に1回(年間6-11回)」が36名(8.3%)、「月に1、2回(年間12-24回)」が13名(3.0%)、「月に数回(年間25-51回)」が13名(3.0%)、「週に1、2回」が3名(0.7%)、「週に3-6回」が1名(0.2%)、「ほとんど毎日」が0名(0.0%)の順であった(図1)。概してみると、年間の飲酒頻度は「年単位」(「1年間で数回」)の飲酒者が多く、「月単位」(「2か月に1回」「月に1、2回」)

「月に数回」、「週単位」（「週に1、2回」「週に3-6回」）の飲酒者は少ない傾向が示された。なお、「飲酒経験なし」と回答したものは89名（20.5%）、「1年間で1回もない」は32名（7.4%）であった。

3.2. 最近1年間の飲酒頻度と飲酒状況の関係

飲酒経験者345名のうち、最近1年間の飲酒回数が0回（32名）を除いた313名の、最近1年間の飲酒頻度と飲酒状況の関係を示した（表1）。「1年間で数回」飲酒していると回答した247名のうち、190名（76.9%）のものが「家族や親類と」飲酒していた。同じく「2か月に1回」家族や親類と飲酒しているものが20名（55.6%）であり、以下「月に1、2回」が9名（69.2%）、「月に数回」が7名（53.8%）、「週に1、2回」が3名（100%）、「週に3-6回」、「毎日」がそれぞれ0名であった。「友達と」飲酒していると回答したものは「家族や親類」に続いて2番目に多く、「1年間で数回」の飲酒者が31名（12.6%）、以下「2か月に1回」が13名（36.1%）、「月に1、2回」が4名（30.8%）、「月に数回」が5名（38.5%）、「週に1、2回」、「週に3-6回」、「毎日」がそれぞれ0名であった。以上の結果をまとめると、「家族や親類と」飲酒しているものは年間の飲酒頻度の多少に関わらず多いが、「友達と」飲酒していると回答したものは、「月単位」（「2か月に1回」「月に1、2回」「月に数回」）の飲酒者が多く、「年単位」（「1年間で数回」）の飲酒者は少ない傾向が示された。

3.3. イッキ飲み経験の有無とイッキ飲み経験者の最近1年間の飲酒頻度

対象者345名のうち、これまでにイッキ飲みの経験が「ある」と回答したものは23名（6.7%）、「ない」と答えたものは322名（93.3%）であった。「ある」と答えた23名に対し最近1年間の飲酒頻度を尋ねた結果、「1年間で数回」が11名（47.8%）で最も多く、以下「月に1、2回」が5名（21.7%）、「2か月に1回」が4名（17.4%）、「1年間で1回もない」が2名（8.7%）、「月に数回」が1名（4.3%）の順であった。

3.4. お酒の強さに対する自己評価

対象者434名に対し、お酒に強いかどうかを尋ねたところ、「普通」と回答したものが196名（45.2%）で最も多く、以下「弱い」が146名（33.6%）、「強い」が47名（10.8%）、「大変弱い」が32名（7.4%）、「大変強い」が13名（3.0%）の順であった。次に、イッキ飲み経験者23名のお酒の強さに対する自己評価をみると、「普通」と答えたものが8名（34.8%）で最も多く、以下「強い」「弱い」がそれぞれ2名（28.6%）、「大変弱い」が3名（13.0%）、「大変強い」が2名（8.7%）の順であった。

4. 考察

本調査で明らかになったU高専1年男子の飲酒経験者の割

合は、これまでに報告されている同年代の調査結果より若干高い傾向にあった。過去に飲酒経験が「ある」と答えたものは対象者の約80%を占めており、先行研究より10%程高い結果であった（2004年⁴⁾71%、2008年⁹⁾67%）。高校生の飲酒経験は学年が上がるほど増加する傾向にあるが、本調査結果は全国の高校3年男子の平均値（2004年⁴⁾81%、2006年⁵⁾76%）に相当する数値であった。一方、最近1年間の飲酒経験者の割合は、これまでに報告されている同年代の調査結果より「年単位」で飲酒しているものが多く、「月単位」、「週単位」の飲酒者は少ない傾向にあった（図1）。本調査の「年単位」の飲酒者は、飲酒経験者の半数を超える約60%であった。先行研究では数値にかなりのばらつきがみられるが、本調査より20-40%程低い数値を示している（表2）。「月単位」の飲酒者は、本調査で「月に1、2回」と答えたものが3%、これに「月に数回」飲酒していると回答したものを含めても6%であったが、先行研究では本調査の倍の数値を示していた。さらに「週単位」の飲酒者は、本調査で「週に1、2回」、「週に3-6回」を合わせても1%にも満たないが、先行研究では5%を超える報告もみられた。それぞれの調査表の質問文や回答項目が若干異なるので、値そのものを厳密に比較するには注意が必要であるが、おおまかな飲酒傾向を比較するには特に問題はないであろう。

ここまでみてきたように、本調査では先行研究に比べ日常的に飲酒をしている、いわゆる常習的な飲酒者の割合が少ないことがわかった。常習的な飲酒者の例数は現地点で取り立てて問題にするほどの数値ではないが、決して軽視できるものではない。なぜなら本調査の飲酒経験者は先行研究より多く「年単位」の飲酒経験者も多いことから、潜在的な問題飲酒予備軍が相当数存在すると考えることも出来るからである。したがって今後注意を払うことは、「年単位」の飲酒者を「月単位」、「週単位」の飲酒者へと移行させないことであろう。それには未成年者の飲酒頻度が増加する要因を知り、事前に予防策を講じて行くことが必要である。たとえば未成年者の飲酒と問題飲酒の関連を示す報告は多数あるが、中高生の飲酒頻度を飲酒状況との関係から検討した尾崎らの報告は参考になる。彼らは年間の飲酒頻度が高いものほど仲間との飲酒機会が多いとし、問題飲酒の予防には仲間との飲酒を早くから経験させないことが重要と述べている¹⁾。本調査においても、「月単位」で飲酒しているものは、「年単位」の飲酒者より友達と飲酒する割合が3倍程高い。「週単位」の飲酒者は例数が少ないのでよくわからないが、年間の飲酒頻度が高いものは友達と飲酒している割合が高い傾向にあった（表1）。尾崎らは仲間との飲酒機会は学年が上がるほど急増するとの報告もしており、未成年者の飲酒防止にはより低学年からの教育が必要と指摘している。本調査では上級生の飲酒実態を調べていないが、今後は進級にともなう飲酒動向を追跡していく必要があるであろう。

未成年者飲酒の最大のリスクは急性アルコール中毒である¹⁰⁾。本調査では対象者のすべてにイッキ飲み経験の有無を

尋ねたが、この6年間の調査期間でイッキ飲みの経験が「ある」と答えたものは23例(6.7%)であった。同年代の比較できるデータがみあたらないので例数の多少を議論することはできないが、参考までに大学生のイッキ飲みの実態を調査した2例の報告¹⁰⁾¹¹⁾と比べると本調査対象者のイッキ飲み経験者はずっと少ない(1998年医学・看護学生74.9%、2002年医学生97.3%、看護学生63.9%)。大学生のイッキ飲みは、卒業・新歓コンパ・合宿・寮など仲間との飲酒機会に頻繁に発生することが報告されているが、こうした場では場の盛り上がりや上下関係による暗黙の強要がなされる傾向にある¹²⁾。事実、寺山らのアンケート調査では、イッキ飲みを自ら進んで行ったもの(39.3%)より、他人に強いられて行ったもの(54.9%)が上回っている。イッキ飲み経験者の8割は、自分はお酒を飲めないと自己評価しているにも関わらず¹¹⁾、周囲の雰囲気左右されるなどして無謀な飲酒行動に及んでいるのである。

一方、本調査対象者のイッキ飲み経験者は大学生のそれに比べてかなり少数であるが、気になる点もいくつかある。たとえば、イッキ飲み経験者にアルコールに対する自己評価を尋ねると、お酒に弱いまたは大変弱いと自覚しているものが3割弱で、残りの6割以上はお酒に弱いと自覚していない。この結果は大学生の調査結果に比べ5割ほど低い。さらに、イッキ飲み経験者の年間の飲酒頻度をみみると、彼らの約5割は「年単位」の飲酒者である。つまり、日頃飲酒経験の少ないものがイッキ飲みを経験しているのである。飲酒経験をある程度積んでいる大人の飲酒者であれば、酔いに応じて酒量をコントロールすることも可能であろうが、経験不足で自分の適量が判断できない未成年者の飲酒では、周りのペースに同調して無謀な飲酒行動を引き起こすことも考えられるのである。未成年者はアルコール分解能力が未発達のため、過度の飲酒は急性アルコール中毒に発展する可能性が高い¹³⁾。ましてや高校生であれば大学生以上に年齢的なリスクをとまなうことも考えられるのである。急性アルコール中毒に発展するような過度の飲酒は命にかかわる重大な問題であるだけに、彼らの自覚を促す具体的な取り組みを検討しなければならない。

5. まとめ

以上、U高専1年男子の飲酒実態を概観してきた。結果として、本調査対象の約8割は過去に飲酒経験のある飲酒経験者であったが、その大半は年間の飲酒頻度が数回程度の少量飲酒者であり、日常的な飲酒習慣のある、いわゆる常習的な飲酒者は少ないことがわかった。また、急性アルコール中毒の危険因子とされるイッキ飲みの経験者は、この6年間で23例(6.7%)存在していたことが明らかになった。冒頭でも述べたように、未成年者の飲酒問題に適切に対処するためには、対象者の実態を正確に把握することである。今回の調査では対象者の飲酒実態のすべてを把握できていないわけではな

いが、今後の飲酒防止教育を推進するうえでのいくつかのポイントを整理することができた。具体的には、年間の飲酒頻度を増加させる要因となる仲間との飲酒機会を早くから経験させないことや、イッキ飲みに対する危機意識を植え付ける具体的な取り組みを検討していくことが必要と考えられた。今後は学年進級にともなう飲酒動向を追跡していく必要があるであろう。

引用文献

- 1) 尾崎米厚ら：中高生の飲酒行動に関する全国調査，日本公衛誌，第46巻(10)，pp. 883-893，1999年11月。
- 2) 上畑鉄之丞ら：2000年度未成年者の喫煙および飲酒行動に関する全国調査報告書，平成12年度厚生科学研究補助金厚生科学特別研究事業研究班，2001年10月。
- 3) 林謙治ら：2004年度未成年者の喫煙および飲酒行動に関する全国調査(確定版)総括研究報告書，平成16年度厚生科学研究補助金厚生科学特別研究事業研究班，2005年9月。
- 4) 勝野眞吾ら：高校生の喫煙、飲酒、薬物乱用の実態と生活習慣に関する全国調査2004，兵庫教育大学教育・社会調査研究センター，2006年8月。
- 5) 勝野眞吾ら：高校生の喫煙、飲酒、薬物乱用の実態と生活習慣に関する全国調査2006，兵庫教育大学教育・社会調査研究センター，2007年9月。
- 6) 大井田隆ら：未成年者の喫煙・飲酒状況に関する実態調査研究 平成21年度総括研究報告書，厚生労働科学研究費補助金循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業，2010年3月。
- 7) 大井田隆ら：未成年者の喫煙・飲酒状況に関する実態調査研究 平成22年度総括研究報告書，厚生労働科学研究費補助金循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業，2011年3月。
- 8) 中山寿一：「21世紀における国民健康づくり運動(健康日本21)」の最終評価について，平成23年度アルコールシンポジウム「アルコール問題を考える」，2012年3月。
- 9) 村上優：未成年者飲酒防止強調月間に因んで，沖縄医報，第46巻(4)，pp. 113-115，2012年。
- 10) 谷本千恵ら：大学生の飲酒行動と意識—遺伝要因と自覚体質が及ぼす影響—，富山医科薬科大学看護学会誌，(1)，pp. 35-47，1998年3月。
- 11) 寺山和幸ら：将来の医療職者に対するお酒と健康に関する質問紙調査とアルコールパッチテスト，市立名寄短期大学紀要，第34巻，pp. 35-47，2002年3月。
- 12) 石谷師子ら：大学生の急性アルコール中毒を防ぐ対策を求める緊急要望書，2010年12月。
- 13) 平山宏宏ら：ハンドブックアルコールと健康，社団法人アルコール健康医学協会，2005年。

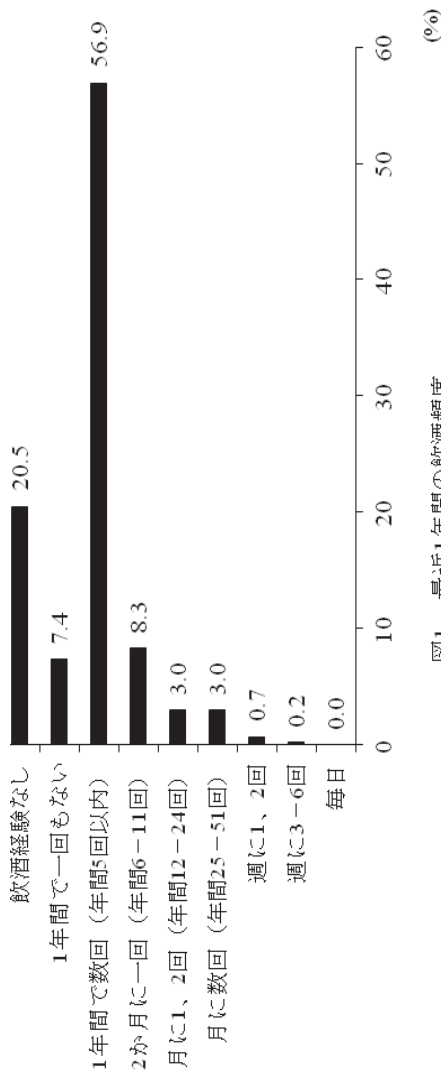


図1. 最近1年間の飲酒頻度 (%)

表1. 最近1年間の飲酒頻度と飲酒状況の関係

	ひとり		友達と		家族や親類と		その他		合計	
	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%
1年間で数回	6	(2.4)	31	(12.6)	190	(76.9)	20	(8.1)	247	(100.0)
2か月に一回	2	(5.6)	13	(36.1)	20	(55.6)	1	(2.8)	36	(100.0)
月に1~2回	0	(0.0)	4	(30.8)	9	(69.2)	0	(0.0)	13	(100.0)
月に数回	1	(7.7)	5	(38.5)	7	(53.8)	0	(0.0)	13	(100.0)
週に1~2回	0	(0.0)	0	(0.0)	3	(100.0)	0	(0.0)	3	(100.0)
週に3~6回	1	(100.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(100.0)
毎日	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)

表2. 全国の高校1年生男子の年間の飲酒頻度

文献	飲まない		年に1、2回		月に1、2回		週末ごと		週に数回		毎日		不明		合計	
	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%
尾崎ら(1996)	3524	(28.8)	3932	(33.3)	3221	(26.7)	520	(4.2)	739	(5.7)	92	(0.8)	51	(0.5)	12079	(100.0)
林ら(2004)	6258	(51.1)	2806	(22.9)	2192	(17.9)	244	(2.0)	623	(5.1)	79	(0.6)	33	(0.3)	12235	(100.0)
勝野ら(2004)	3631	(42.8)	3250	(38.3)	1222	(14.4)	-	-	259	(3.1)	42	(0.5)	84	(1.0)	8488	(100.0)
勝野ら(2006)	4442	(50.8)	2963	(33.9)	989	(11.3)	-	-	229	(2.6)	42	(0.5)	78	(0.9)	8743	(100.0)
大井田ら(2008)	6924	(68.0)	1628	(16.0)	1142	(11.2)	110	(1.1)	304	(3.0)	45	(0.4)	22	(0.2)	10175	(100.0)
大井田ら(2010)	853	(66.8)	201	(15.7)	156	(12.2)	9	(0.7)	44	(3.4)	12	(0.9)	2	(0.2)	1277	(100.0)

一：収集されていないデータを示す